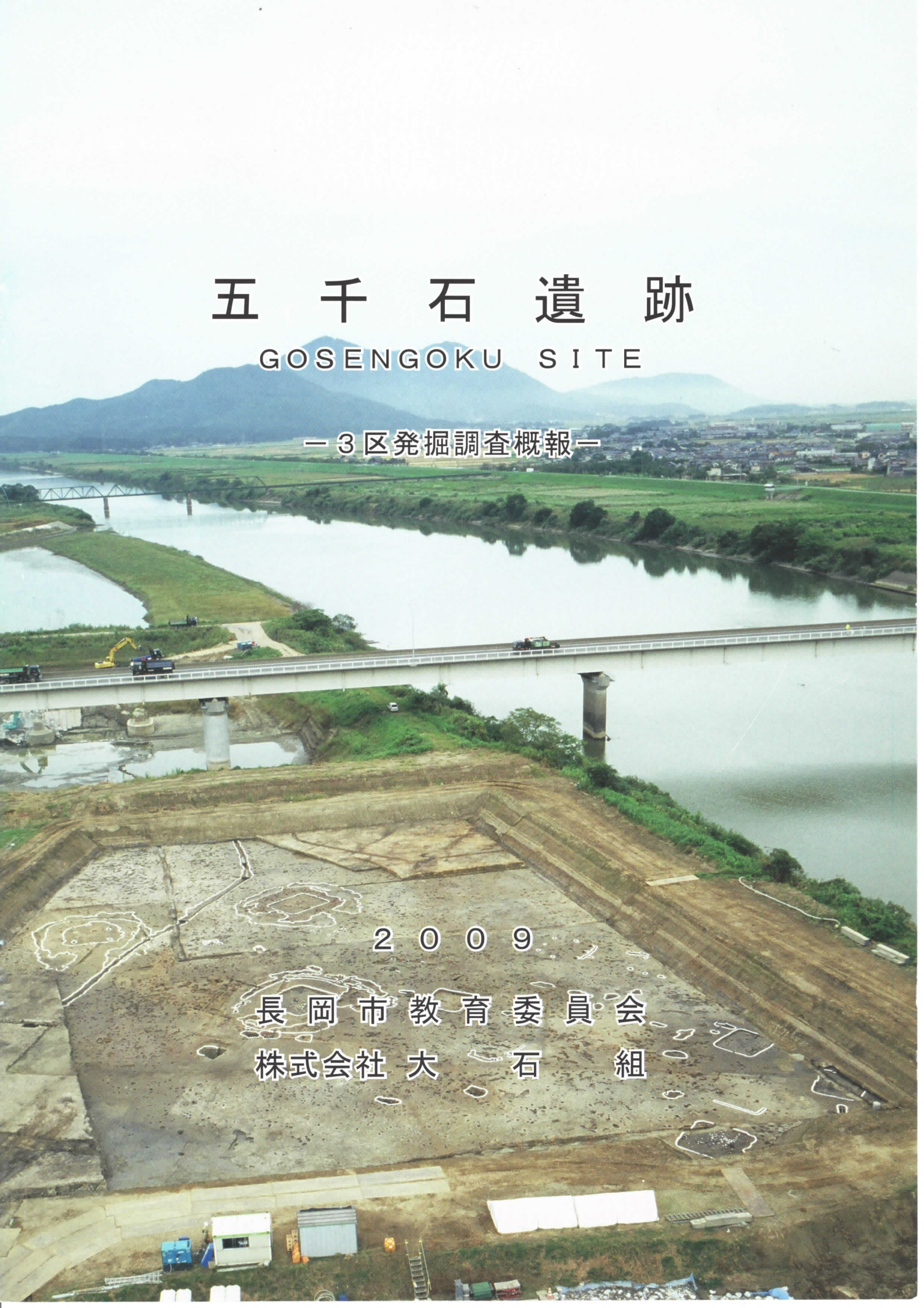
五　千　石　遺　跡

GOSENGOKU SITE

－３区発掘調査概報－



２００９

長岡市教育委員会

株式会社 大　石　組

例　言

1　本書は、新潟県長岡市寺泊敦ヶ曽根地内の大河津分水路河川敷に所在する五千石遺跡の３区の発掘調査の記録である。

2　発掘調査は、大河津分水路可動堰改築事業に伴い、長岡市が国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所から受託し、平成20年４月から平成21年３月に実施した。

3　発掘調査にかかるすべての費用は、国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所が負担した。

4　発掘調査は、長岡市教育委員会が主体となって行った。長岡市は調査にあたり、調査にかかるすべての作業を株式会社大石組に委託した。

5　出土遺物及びすべての記録類は、長岡市教育委員会が保管している。

6　本書の執筆は、加藤由美子（長岡市教育委員会）、岩松和光（株式会社大石組文化財事業部）、竹部佑介（同）、南波守（同）、松井奈緒子（同）がこれにあたり、文末に執筆者名を記した。また、竹部・南波が編集を、加藤が総括を行った。

7　調査から本書の作成に至るまで、多くの方々からご協力、またご教授を賜りました。記して御礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

赤澤徳明　穴澤義功　尾崎高宏　春日真実
小池勝典　小林巌雄　酒井英男　関　雅之
滝沢規朗　竹之内耕　田中耕作　鶴巻康志
戸根与八郎　廣瀬時習　松島悦子　水澤幸一
三ツ井朋子　渡邊朋和

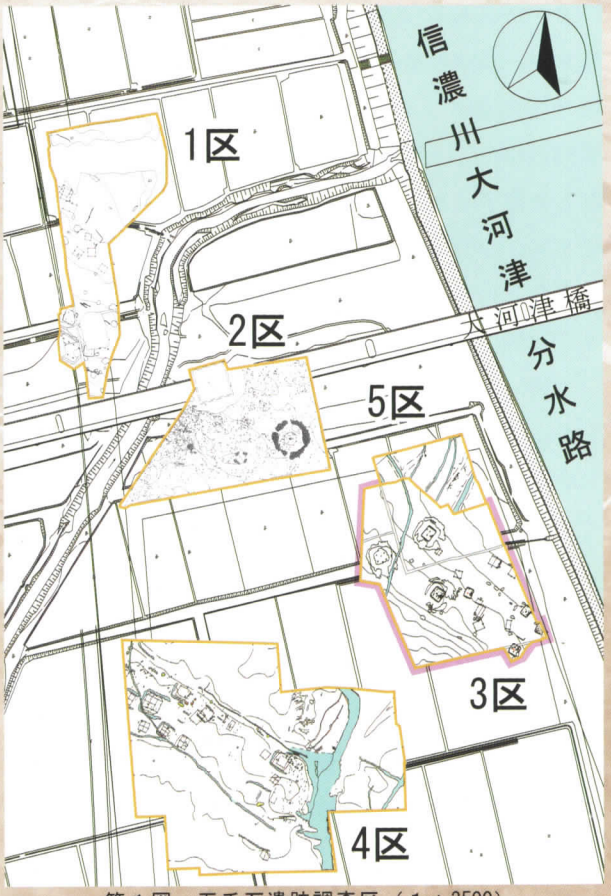
平成20年度調査体制

調査主体	長岡市教育委員会（教育長　加藤孝博）	
管理	山屋　茂人	（科学博物館館長）
	田中　　靖	（　同　文化財係長）
監督	加藤由美子	（　同　文化財係主任）
調査組織	株式会社大石組	
現場代理人	田中　博明	（文化財事業部）
調査担当	岩松　和光	（　同　）
調査員	竹部　佑介	（　同　）
	南波　　守	（　同　）
調査補助員	神林　康子	（　同　）
	松井奈緒子	（　同　）

調査の経緯

五千石遺跡の発掘調査は、国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所の大河津分水路可動堰改築事業に伴い、平成18年度からの３か年計画で長岡市・燕市両教育委員会が実施している。延べ調査面積が33,900㎡と広大なため、調査区をあらかじめ５区に分け、平成18年度に１区（長岡市）・２区（燕市）、平成19年度に４区（長岡市・燕市）・５区（長岡市）の調査を終了した。調査最終年となる平成20年度は、長岡市教育委員会が３区の上層（Ⅴ層）1,400㎡・下層（Ⅶ層）4,700㎡の計6,100㎡の調査を実施した。

平成20年４月１日、長岡市は国土交通省と五千石遺跡発掘調査業務委託契約を締結し、６月４日から重機による表土除去を開始した。同12日から作業員による発掘調査に着手し、同19日に上層の航空写真撮影を行った。その後引き続き下層の調査に移り、古墳時代前期の集落跡を確認した。９月25日、下層の航空写真撮影を行った。同27日には現地説明会を開催し、雨天の中166人の来場者を得た。10月11日、全調査を終了し、以降３月下旬まで整理作業を実施した。　（加藤）

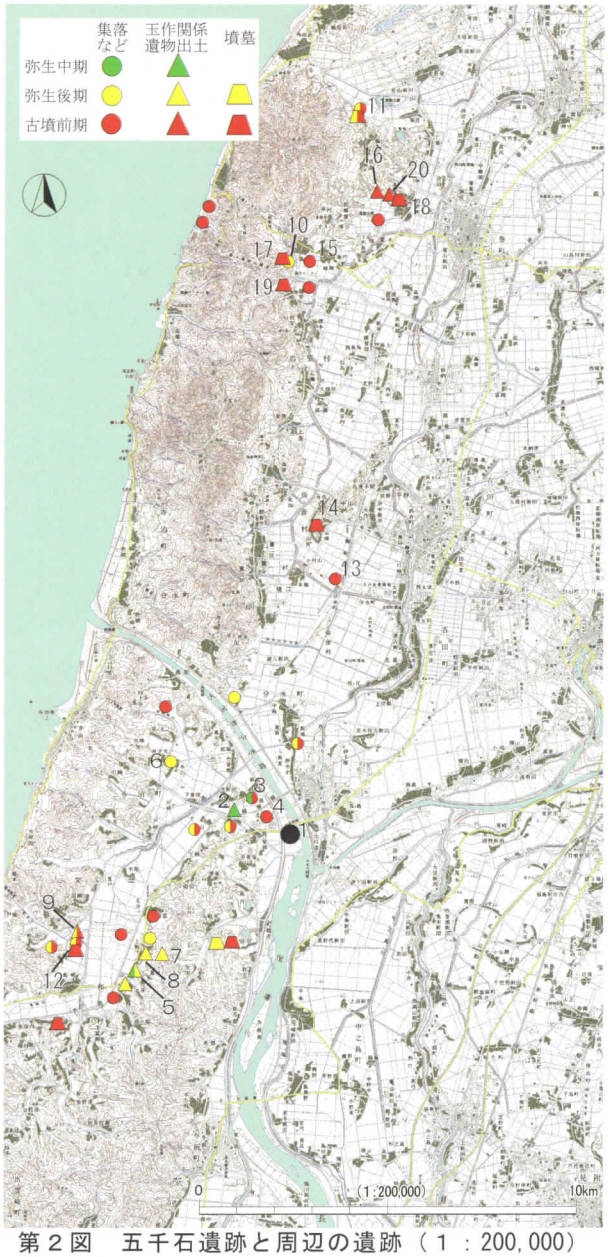


第１図　五千石遺跡調査区（１：3500）

平成18･19年度調査の概要

平成18年度の１区・２区は、大雨（７月19日）による現場の水没を乗り越えての調査であった。１区では、標高10ｍの南東へのびる微高地上に、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡８棟、周溝を持つ建物跡１棟などから構成される古墳時代前期の集落の一端が明らかになった。集落の本体は北西方面と思われ、密度は薄くなるものの「黒川」を挟んで更に２区へと及んでいる。遺物は、古墳時代前期の土器と管玉１点、弥生時代中・後期および縄文時代晩期の土器と勾玉、石刀、石鏃などの石器、石製品がある。２区の遺構は、四隅の切れる周溝状遺構１基、古墳時代前期の掘立柱建物跡１棟と、周溝を持つ建物跡は、中心部の土坑の遺物年代から、弥生時代中期の遺構とされている。このほかに縄文時代晩期の埋設土器２基などにより構成されている。遺物は、弥生時代中・後期と古墳時代前期の土器と、縄文時代晩期の遺物群は充実しており、注口土器や深鉢型土器をはじめ、石鏃、石冠、石刀、石棒、石斧と凝灰岩製の玉類２点が出土している。

平成19年度は、４・５区において上層（Ⅴ層）と下層（Ⅶ層）の二面調査を行った。４区では１区から３区の古墳時代前期集落に対置するように、南側の小谷を挟んで、新たな微高地の存在が明らかとなる。４区西側の上層遺構はこの微高地上に展開し、コの字状、Ｌ字状の溝をともなう掘立柱建物跡12棟が主体となって、井戸、焼土遺構、土坑などがとりまいている。これらは古墳時代後期の遺構群である。下層遺構である前期の掘立柱建物跡２棟も検出されている。集落の東側を南北に流れる水路（SD11）からは、多量の流木材の中から上層期の堰遺構が南部域から、下層期の堰遺構が北部から出土している。４区の遺物は、掘立柱建物跡の溝から土師器の杯・甕、須恵器の杯・甕の良好な資料が得られたほか、土坑から須恵器の甕が出土している。木製品ではナスビ形農耕具、鋤、弓、田下駄、杭のほか、転用された有頭垂木やＹ字状材などの建築材、SD11内や微高地縁辺部からは、臼玉、剣型などの石製模造品、勾玉などが出土している。堰遺構から分けられた水は、SD14 や５区のSD51・55および支溝を通じて、耕地に配られた可能性がある。５区のⅢ層中から平安時代の須恵器杯が出土している。　（岩松）



第２図　五千石遺跡と周辺の遺跡（１：200,000）

国土地理院平成17年発行の1：50000「弥彦」「三条」を元に作成した。

写真１　五千石遺跡周辺（北から）

写真右下の矢印が五千石遺跡（３区）、奥に東頸城丘陵と島崎川流域が広がる。

（提供　国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所）

立地と環境

五千石遺跡（１）は、大河津分水路左岸の河川敷に所在し、標高は10ｍ前後を測る。周囲には、信濃川や旧島崎川などによって形成された自然堤防が発達しており、また、東頸城丘陵の先端部が島状に残る。五千石遺跡を含めた周辺の遺跡は、これらの微高地上に展開する。ここでは、周辺の集落遺跡を中心に、弥生時代から古墳時代にかけての信濃川左岸における遺跡分布と、玉作遺跡の変遷を概観する。

弥生時代中期における五千石遺跡周辺の集落遺跡には、玉作関係遺物が出土した諏訪田遺跡（２）や草薙遺跡（３）がある。野起遺跡（４）からは少量ではあるが、この時期の土器が出土している。近接して複数の遺跡が存在しており、近隣での集団的な結合がうかがえる。島崎川流域の松ノ脇遺跡（５）では、中期後半以降、北陸南西部や中部高地、東北地方などの土器が出土し、他地域との活発な交流が認められる。管玉未成品が出土しており、玉作が他地域との交流に用いられた可能性が考えられる。

弥生時代後期の五千石遺跡周辺には、舞台島遺跡（６）があるが、玉作は確認されていない。島崎川流域では、高地性集落の赤坂遺跡群（７）をはじめ、上桐神社裏遺跡（８）、大武遺跡（９）など複数の玉作遺跡が存在し、遺跡数の増加とともに、玉作集落も増加した様子がうかがえる。一方、角田・弥彦山麓においては、山谷古墳下層遺跡（10）や、大沢遺跡（11）が存在するが、遺跡数は島崎川流域に比べて少なく、玉作遺跡は確認されていない。

古墳時代前期に入ると、五千石遺跡周辺では、野起遺跡などがある。島崎川流域では、奈良崎遺跡（12）・大武遺跡が存続する一方、弥生時代後期に玉作を行っていた赤坂遺跡群などの集落は、この時期には廃絶する。これに対して、角田・弥彦山麓では、弥彦丘陵の東で蒲田遺跡（13）、稲場塚古墳（14）があり、時期が下ると御井戸遺跡（15）や南赤坂遺跡（16）のように角田山麓で集落が営まれる。山谷古墳（17）や菖蒲塚古墳（18）、観音山古墳（19）といった信濃川左岸を代表する古墳が築造され、角田・弥彦山麓が優位に立つ様子がうかがえる。また、南赤坂遺跡や越王遺跡（20）では玉作が行われるようになる。　（竹部）

平成20年度の調査概要

３区には、Ⅴ層とⅦ層の２面の遺構確認面がある。Ⅴ層では、古墳時代後期の溝７条と、井戸２基を検出した。溝は、平成19年度調査の５区で検出された溝の続きであり、さらに４区へ続くものと想定される。包含層、遺構ともに遺物は少なく、土師器片、木製品、それと臼玉１点が出土している。

Ⅶ層では古墳時代前期後半を中心とする集落跡を確認した。集落は、調査区を北西から南東方向に延びる、馬の背状の微高地上に展開している。また、平成19年度調査の４区との間は谷状地形となっており、４区と３区の微高地が平行に並んでいることを確認した。

遺構は、竪穴住居跡７軒、掘立柱建物跡８棟、土坑39基、溝、井戸などである。竪穴住居跡の時期は、出土した土器から、新潟シンポ編年の９・10期（古墳時代前期後半）が主体である。竪穴住居跡のうち、SI07・09・10は周溝を持っており、またSI03とSI07では緑色凝灰岩製の管玉未成品や剥片が出土した。掘立柱建物跡は１間×２間が主体で、主軸方向が微高地に並行するグループ（SB12・14・16・17）と、直交するグループ（SB11・13・15・18）に大別できる。SB15とSB17には切り合い関係がみられる。SD66は集落の西辺を区画するように、微高地を切って南北に延びている。また、22Ｚ－24・25グリッド付近の南側斜面では土器の集中地点があり、壺４個体と甕５個体分がまとまって出土している。（南波）

基本層序

平成18年度、19年度の基本層序と同様に、Ⅰ層からⅦ層に分層できる。大河津分水路通水以降の堆積土であるⅠ層、それ以前の耕作土であるⅡ層、灰白色土のⅢ層と続き、ガツボ層であるⅢｂ層は標高の低い地点に堆積する。黒褐色土のⅣ層は古墳時代後期の遺物包含層で、標高の低い調査区南側では、青灰色土を含む５層に細分できる。古墳時代後期の遺構確認面であるⅤ層の堆積は、微高地上で薄く標高が低くなるにつれて厚い。縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての遺物包含層であるⅥ層は黒色土で、調査区南側で４つに分層できる。また、その下部のⅥｂ層は縄文時代晩期の遺物の出土に伴って部分的に堆積する。Ⅶ層は古墳時代前期の遺構確認面である。（松井）

写真２　３区下層

写真３　発掘調査風景

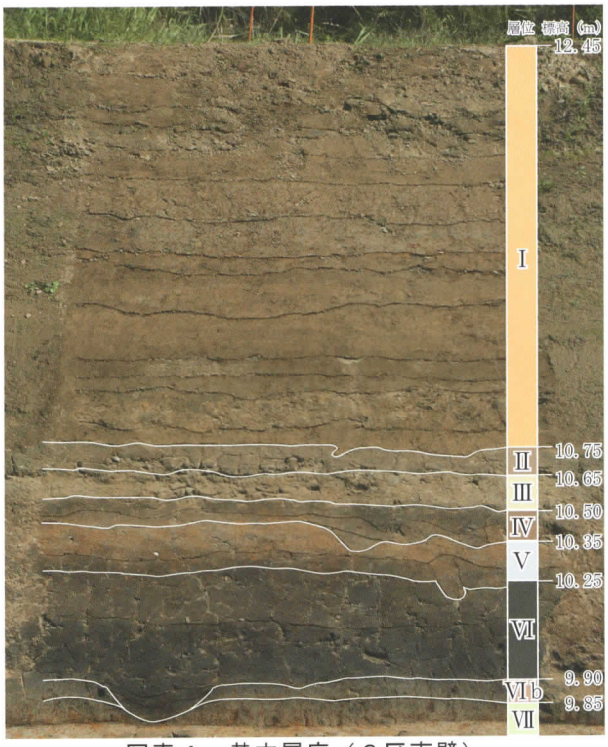


写真４　基本層序（３区南壁）

第３図　３区・４区東地区・５区上層（１：1000）

３区上層遺構

古墳時代後期の溝、井戸、ピットを検出した。遺物はコンテナ約２箱がSD51を中心に出土した。

溝　平成19年度調査の５区で確認したSD51、SD52、SD55、SD56のつながりと、新たにSD62、SD63を検出した。５区から続く溝には、切り合い関係はない。南へ延びて、平成19年度調査の４区で確認されたSD14と接続する可能性がある。SD55の真下では下層遺構のSD66が確認でき、重ねて掘り直した様子がうかがえる。SD56の掘り方には柱痕跡を２基確認した。また、内面黒色処理された杯（第５図１）はSD51からの出土である。

SX71　平面は径100cmの円形、断面は逆台形、底部径は32cmを測る。深さは104cmで、覆土はレンズ状に自然堆積する。遺物は、底部より木片と土師器片が出土したのみである。規模や形状などから井戸と考えられる。

SX76（上層）　平面は径105cmの円形、断面は径55cmの筒形で上部は朝顔形に開き、深さは109cmを測る。炭化物の多い層を間に挟み、レンズ状に自然堆積する。SX76（下層）が埋没した後に掘り返された井戸と考えられる。ヘラ状の木製品（第６図89）と臼玉(90)が出土した。(松井)

写真５　３区上層

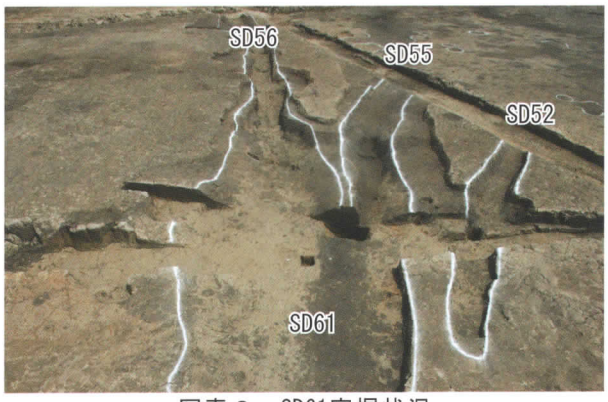


写真６　SD61完掘状況

3区下層遺構

SI03（写真７）　調査区の南東隅に位置する竪穴住居跡である。主軸はN－66°－Wで、長軸4.86ｍ×短軸4.72ｍの隅丸方形を呈する。確認面から床面までの掘り込みは、深いところで22cmを測る。主柱穴は、住居中央寄りに長軸方向で２基確認された。住居内遺構には壁周溝、ピット、土坑、溝状遺構、炉跡がある。土坑は３基あり、中でも南側角に位置するものは、住居のプランよりも外側に張り出す。炉跡は住居の中央寄りに３基検出され、そのうち最も中心に位置する１号炉は鍛冶炉（写真８）である。鍛冶炉は、現状25cm×21cmの南北方向に長い楕円形で、断面形は皿状を呈する。床面からの深さは３cmと浅い。炉の周囲には、炉壁が部分的に残っており、炉内には椀形鍛冶滓の一部と、鍛造剥片が確認できる。また、住居の覆土中や床面からは羽口の破片も出土しているが、取り付け位置は不明である。鍛冶炉以外の２基の炉は、地床炉である。これら３基の炉の直上には、厚み２cmほどの炭化物層が広がっていた。

遺物は土師器、玉作関係遺物、鉄関連遺物などがある（第５図４～22）。土師器には甕・壺・高杯・器台・鉢があり、覆土および床面、土坑などから出土した。おおよそ、新潟シンポ編年の８・９期（古墳時代前期後半）におさまると考えられる。玉作関係遺物には、管玉の製作工程を示す資料として、緑色凝灰岩製の角柱状、四角柱状、多角柱状のほか、穿孔途中、穿孔後、仕上げの研磨途中などの各段階の未成品と、石核、それに大量の剥片があり、覆土の下層から床面にかけて多く出土している。ただし、完成品は出土していない。住居の東側には溝状の遺構があり、緑色凝灰岩の剥片や管玉未成品がまとまって出土している。また、住居の中央付近にあるピットには、人頭大の石が据えてあり、その周辺では床面に剥片が無数に飛び散っていた（写真10）。このことから、この石が打割時の台石として使用されたものと考えられる。ただし、この台石は鍛冶炉から約80cmと近く、金床石の可能性も考えられる（写真９）。また、台石のほかにも、住居内からは敲石や砥石の破片が多数出土しており、これらが玉作あるいは、鍛冶のいずれに使用されたものであるかは、今後さらに検討が必要である。　（南波）

写真７　SI03 床面検出状況（南東から）

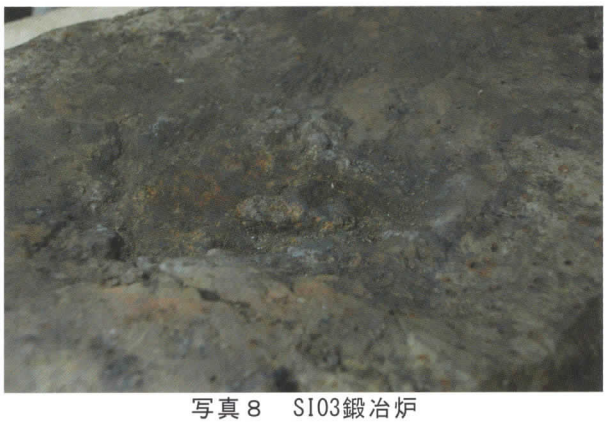


写真８　SI03鍛冶炉

写真９　SI03鍛冶炉周辺

写真10　SI03台石周辺　遺物出土状況

Ⅵ層遺物出土状況

SI08 出土　器台 (39)

SB11-SP598 出土　柱材

SI06 出土　壺 (45)

SI04 出土　管玉 (32)

Ⅵ層出土遺物　高杯 (95)

SD70 遺物出土状況

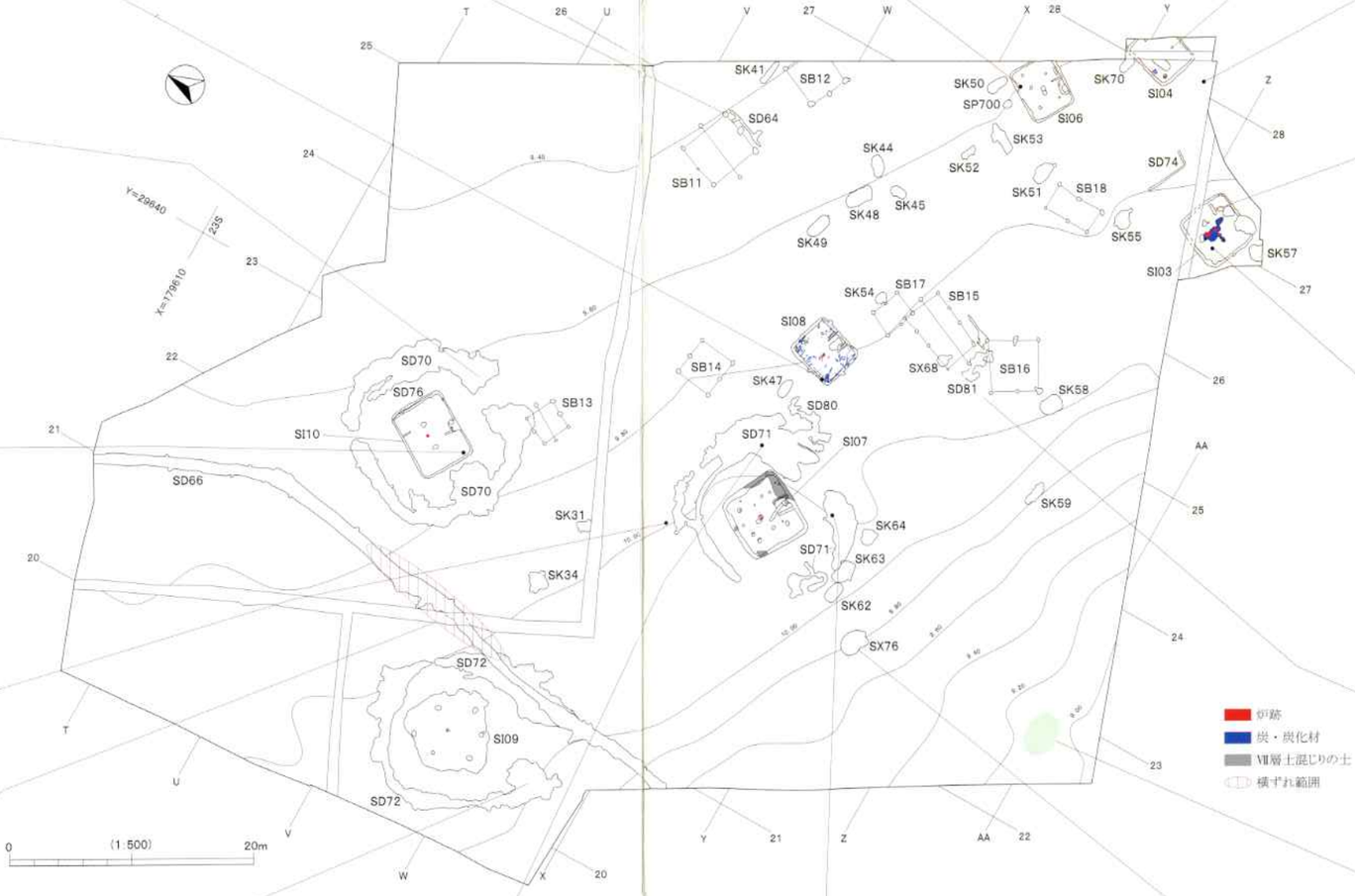
SI03 出土　緑色凝灰岩の剥片・管玉未成品

SI10 出土　器台 (78)

SI03 出土　管玉未成品 (20)

Ⅵ層出土　石鋸 (100)

SB15・16・17 全景（北から）



SD66 横ずれのセクション（南から）

SD72 出土　甕 (70)

SD71 出土　高杯 (58)

SD71 出土　器台 (61)

SX76 出土　板材

土器集中地点 (91 ～ 94)

第４図　３区下層平面図（１：500）・状況写真

―キャプション中の遺物番号は第５・６図に対応する

写真 11　SI04（南東から）

写真12　SI06（南東から）

写真13　SI07

写真14　SI07床面の遺構と遺物出土状況（東から）

SI04（写真 11）　調査区の東界に位置する。住居は長軸 4.56 m、短軸 3.84 mの隅丸長方形を呈し、主軸はN－73°－Wを向いている。炉跡は、住居の西辺寄りに 28cm × 19cm の規模で、貼床面上に検出されている。焼土（火床）の厚みは 1 cm 程度と薄く、硬化していない。住居内の土坑は、貼床面下より検出されている。住居内ピットは管玉を出土したピットを除くと、掘り込みが浅く不揃いである。管玉は 4 点の完成品（第 5 図 29 ～ 32）が出土している。30、31 は覆土中より、32 はピットより、29 は床下土坑の出土である。甕（24）は新潟シンポ編年 9 期に比定される。　（岩松）

SI06（写真 12）　SI04 の北西に位置する。長軸 4.70 m、短軸 3.92 mの隅丸長方形を呈し、主軸はN－56°－Wとやや振れ方が小さい。南東の壁側には、壁周溝に接続するコの字状の溝に囲まれて、地山Ⅶ層が掘り残され、その脇には、間仕切り状の溝が検出されている。床面中央のピットからは木質の残片が出土するが柱穴は判然としない。遺物は壺（第 5 図 45）が北西壁際の覆土中から出土しており、新潟シンポ編年 9 期前後に比定される。（岩松）

SI07（写真 13）　調査区ほぼ中央に位置する。長軸 5.84 m、短軸 5.54 mの隅丸方形で、床面までは最深で約 26cm を測る。主軸はN－61°－Wを向き、周溝（SD71）を持つ。

主柱穴は 4 基ある。中央やや西寄りには、長軸 80cm、短軸 40cm の焼土層のある炉跡を 1 基検出した。住居内の床面や覆土中からは、緑色凝灰岩の剥片が多数出土している。貼床上には住居の壁際に沿って、部分的ではあるがⅦ層土混じりの土と、炭化物層の堆積が確認できた。また、東側の壁周溝に接続して、2 本の細長い溝に囲まれた、長軸約 1.3 m、短軸 1 m、深さ約 0.2 mの掘り込みと、それにつながる長さ 1.73 m、幅約 0.2 m、深さ約 0.1 mの浅い溝を検出した（写真 14）。ここから、こぶし大程の擦り面を持った石と、蛇紋岩製の棗玉（第 6 図 68）、そして緑色凝灰岩の剥片が集中して出土した。また、覆土中から擦切溝のある未成品や、貼床中から仕上げ段階と思われる管玉の破片（67）が出土している。

周溝（SD71）は、長軸 15 m、短軸 14.7 mで南西隅が一端途切れ、南東に約 2.5 m開口する。溝幅の広がる開口部付近に遺物が集中し、新潟シンポ編年の 10 期に相当する壺（第 6 図 56）、小型丸底壺（65）、高杯（58）が並ぶように出土した。　（松井）

SI08（写真15） 調査区のほぼ中央に位置する。長軸4.46ｍ、短軸3.80ｍ、軸線方位はＮ－73°－Ｗを向いている。掘り込みは25cm程、炉跡は住居の中央西寄りに位置する。竪穴住居内は焼け落ちた炭化材が多量に検出され、火災住居の様相を呈する。東壁側には1.2ｍ×0.6ｍの浅い掘り込みをはさむ形で、４本の仕切状の浅い溝が検出されている（写真16）。住居の壁にかかるピットは、約40cmの掘り込みを持ち、小屋組を支えたと思われる。遺物は、緑色凝灰岩製の算盤型玉１点と鉄石英などの剥片13点が覆土中より、土師器器台（第５図39）と小型丸底壺（37）は覆土最下層より出土している。新潟シンポ編年９期に相当する。（岩松）

SI09（写真17） 調査区の西端に位置する。長軸6.68ｍ、短軸6.50ｍで周溝（SD72）を持つ竪穴住居跡である。往時は隅丸長方形だったと考えられるが、他の掘り込み等が重複し、平面プランは不整形を呈する。確認面からの掘り込みは約６cmと浅い。主軸はＮ－24°－Ｗを取り、他の竪穴住居跡と大きく異なる。主柱穴は４基存在し、棟持柱跡と考えられるピットが２基ある。住居内ほぼ中央で検出した焼土面は、炉跡と考えられる。周溝は、幅が平均0.95ｍで、深さは約0.2ｍである。南東辺で途切れ、端部がバチ状に広がる。また、一部がSD66に切られている。周溝から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器（第６図69～70）が少量出土している。（竹部）

SI10（写真18） SI07の北に位置する。長軸6.08ｍ、短軸4.64ｍで隅丸長方形を呈し、周溝（SD70）を持つ竪穴住居跡である。確認面からの掘り込みは７cmと浅い。主軸はＮ－59°－Ｗを取る。住居内では、長軸と平行に主柱穴が２基が並ぶ。また、ほぼ中央に炉跡と思われる焼土を１基検出した。北東辺の壁際では、切り合いを持つ２条の壁周溝が検出されており、壁面の改修が考えられる。南東辺の壁際で掘り込みに細い溝が取り付く遺構が１基検出された。周溝は幅が平均1.4ｍで、南東辺で途切れ、SI09同様に端部はバチ状に広がる。確認面から約20cm掘り込んでいる。住居床面からは、新潟シンポ編年９・10期の高杯（第６図75）・器台（78・80）が転倒した状態で出土、周溝からは主に開口部付近から同時期の土師器（71～74・76・77・79・81～84）が出土している。（竹部）

写真15　SI08炭化材出土状況（東から）

写真16　SI08床面の遺構と遺物出土状況（東から）

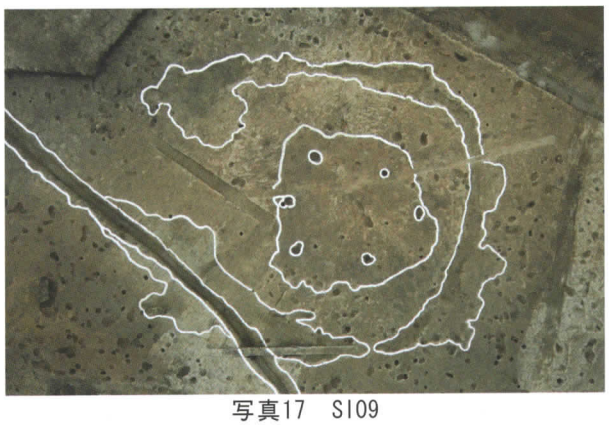


写真17　SI09

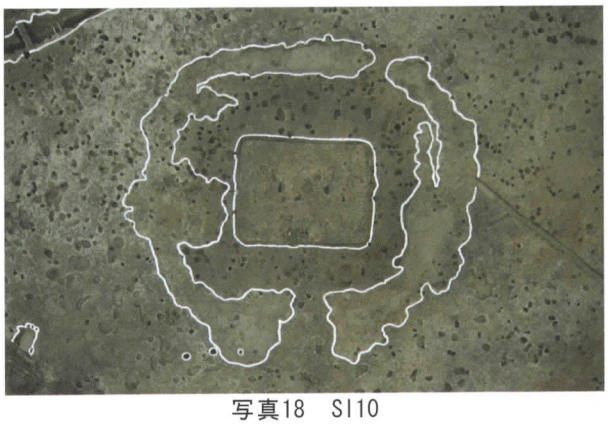


写真18　SI10

写真19　SX76セクション（南東から）

写真20　SD66遺物出土状況（南から）

写真21　SK47遺物出土状況（南から）

写真22　SK50遺物出土状況

SX76（下層）（写真19）　微高地南側の斜面上に位置し、下層と上層で２回にわたって同じ位置に掘削されている。下層では長径2.26ｍ、短径1.68ｍの不整円形、遺構確認面から深さ1.28ｍ、断面形はＵ字状を呈する。下層覆土の下半は、層理が何重にも薄く堆積しており、水をたたえつつ時間をかけて埋没していった様子がうかがえる。遺物はコンテナ約半箱の土師器（第６図85～87）に加え、ヘラ状に加工された木製品（88）や板材（第４図下段右）、杭、ひょうたんなどが出土した。壺86など、出土遺物は竪穴住居跡とほぼ同時期のものであろう。ひょうたんは未加工で、底面付近で転がるようにして出土した。木製品やひょうたんが出土したことと、遺構の規模などから、SX76は井戸跡であると考えられる。　（竹部）

SD66（写真20）　３区を南北に貫く溝跡で、調査区全体での延長は55ｍを測る。幅は平均1.1ｍ、確認面からの深さは約0.5ｍで断面形は逆台形を呈する。直線的に伸び、SI09の周溝を切っているが、３区の北端から約16ｍの地点でSI10を意識するように「く」の字に曲がる。また、21Ｕから21Ｖグリッドにかけて、SD66の上半が西側に、下半が東側に横ずれを生じている箇所を確認した（第４図下段左）。１区・２区で検出した横ずれと同じものであろう。平成19年度５区上層では、このSD66が埋没後、これをなぞるように掘削された上層時期の溝SD55が検出されている。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器（第５図48～50）が少量、ほとんどが浮いた状態で出土した。SI10を意識した流路プランから、SD66は、竪穴住居跡と同時期に利用されていたと考えられる。　（竹部）

SK47（写真21）　土坑の規模は、長軸1.65ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.6ｍ程で、形状は長楕円形を呈する。隅は丸く不揃いである。SK47はSI08の西1.65ｍに軸線を揃えて近接している。遺物は、甕・壺（第５図41～44）を図示している。新潟シンポ編年の９期前後の時期と思われる。竪穴住居と同じ軸線方向、あるいは直行方向に位置する土坑は、SI04に対するSK70、SI06に対するSK50・51・53などがあり、形状は様々で、長楕円形、四隅の張るもの、内部に段をもつものや不整形なものもある。出土する土器に、あまり時期差はない。SK50からは管玉１点が出土している。　（岩松）

出土遺物（第６図）

91～94は、22Ｚ－24・25グリッドのⅥ層から出土した古墳時代前期後半の土師器である。壺４個体と甕５個体が一か所でかたまって出土し、壺３個体と甕２個体はほぼ完形に復元できる。赤彩されているものも多く、何らかの遺構に関わる土器群と考えられるが、断ち割り調査の結果遺構は確認できなかった。

100はⅥ層から出土した流紋岩製の石鋸である。出土地点の22Ｗ－14グリッドは、SI07の周溝（SD71）に近接する。長さ15.3cm、幅7.5cmを測る。

101は緑色凝灰岩製の管玉である。27Ｗ－16グリッドから出土した。長さ4.2cm、直径1.1cmを測る。(加藤)

まとめ

調査の結果、上層（Ｖ層）で古墳時代後期の溝を、下層（Ⅶ層）で古墳時代前期後半の集落跡を検出した。今回検出した上層の溝は、平成19年度調査の５区で検出したSD51・SD52・SD55・SD56の続きにあたる(第３図)。このうちSD52・SD55・SD56の３条は、３区の北西隅で合流することが明らかになった。３条の溝が合流してできたSD61は南へ延び、調査区南端で今度はSD51と合流する。２条が合流してできたSD51はそのまま４区の方へ向かい、その先の状況は不明である。４区にはSD14やSD11といった、SD51と同一軸に流れる溝が存在しており、それらとSD51との関係解明が今後の課題である。

３区下層で見つかった古墳時代前期後半の集落跡は、北西から南東に向かって延びる微高地上に立地する。４区でも同じような微高地が確認されており、２つの微高地は小さな谷状地形を間に挟みながら、互いに平行に延びていることがわかった。４区の微高地上には３区の前期集落から時代を下ること約100年後、古墳時代後期の集落が形成される。詳細が不明な中期は別として、この発掘調査により古墳時代前期から後期に至る五千石遺跡での集落変遷の様相が明らかになったのである。

３区で７軒見つかった竪穴住居跡は、新潟シンポ編年の８期から12期の範疇に収まると考えられる。それぞれの住居には若干の時期差が存在し、住居形態もバラエティーに富む。平面プランが正方形のもの、長方形のもの。住居に周溝が巡るもの、巡らないもの。住居内の一辺に土坑、いわゆる住居内土坑あるいは工作用ピットを持つもの、持たないもの。主柱穴が並ぶもの、並ばないもの。主柱穴が２基あるもの、４基あるもの、さらに棟持ち柱を持つものなど、様々な要素が組み合わされる。まずはそれぞれの竪穴住居の時期を把握し、ここであげたような特徴を照らし合わせてみることで、古墳時代前期における住居形態の変遷が明らかになるだろう。

SI03とSI07からは多くの玉作関係遺物が出土した。寺泊地域での剥片や未成品を伴う古墳時代前期の玉作遺跡の発見は、この五千石遺跡が初例であり、ここでの管玉製作工程の復元が何よりも求められる。SI03で見つかった鍛冶炉と合わせて、玉作行為と鍛冶行為との関係を今後検証していきたい。

３年間にわたる発掘調査は、当初の予想をはるかに超える遺構や遺物に恵まれ、大きな成果をあげることができた。延べ33,900㎡という広大な面積を調査したことにより、多角的な視点から遺跡全体を評価することが可能になったといえる。今後は平成22年度の本報告書の刊行に向け、調査で得た膨大な量の記録や遺物をもとに、五千石遺跡の全体像をひとつひとつ丁寧に検証していきたいと思う。（加藤）

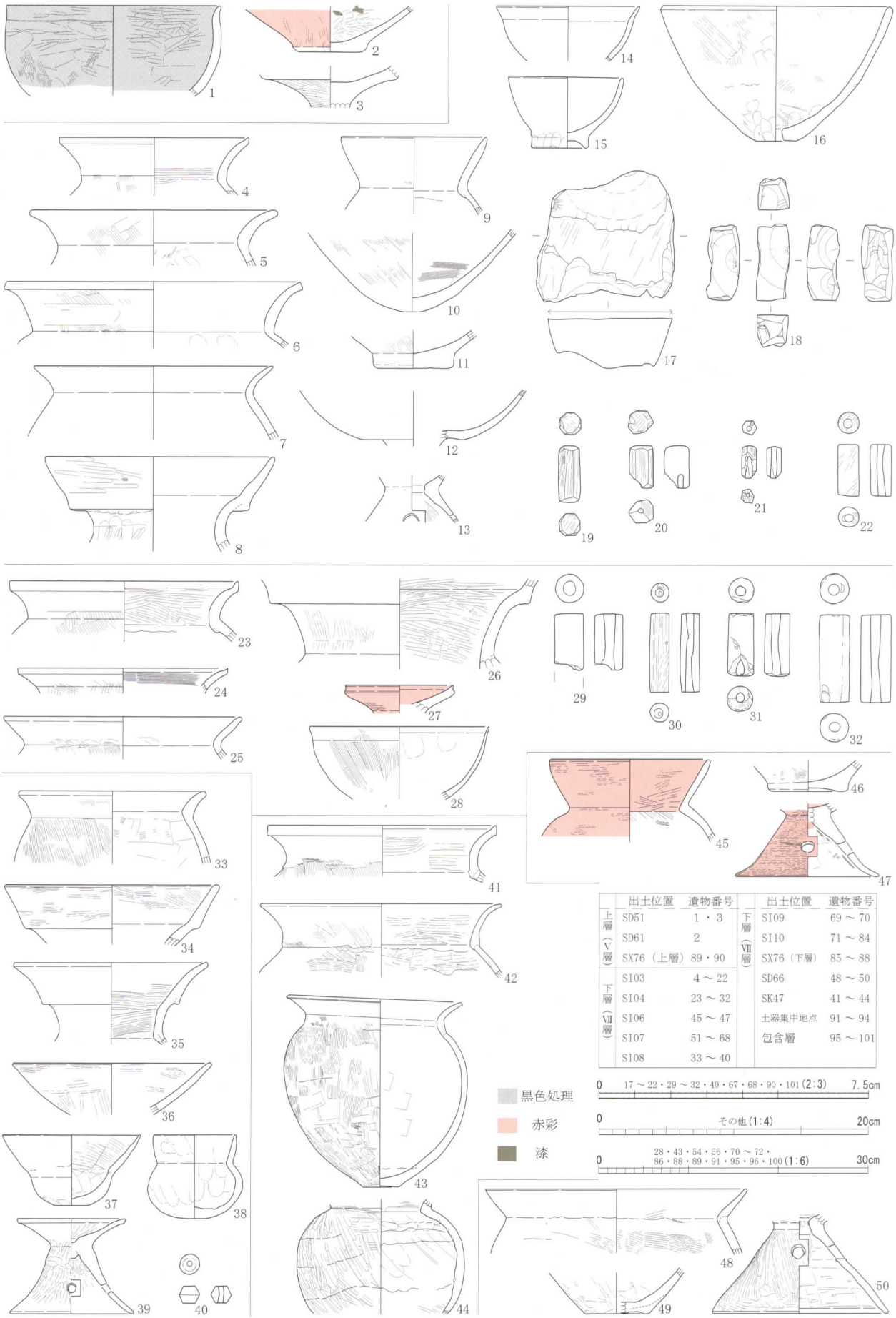
〔参考文献〕

松島悦子ほか　2007『新潟県燕市五千石遺跡２区発掘調査概要報告書』燕市教育委員会

松島悦子ほか　2008『新潟県燕市五千石遺跡４区発掘調査概要報告書』燕市教育委員会

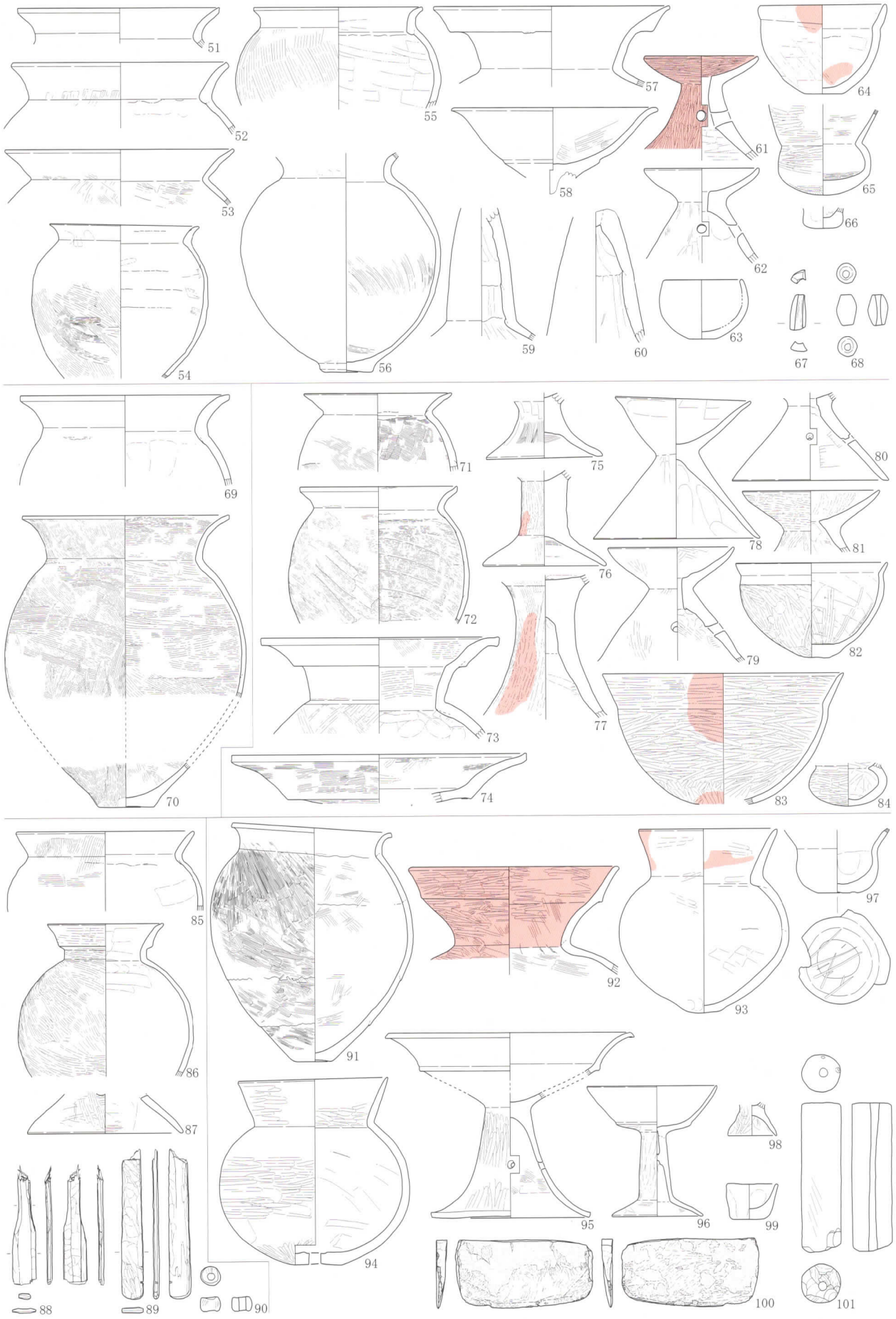
駒形敏朗ほか　2007『五千石遺跡１区発掘調査概報』長岡市教育委員会・株式会社大石組

駒形敏朗ほか　2008『五千石遺跡４・５区発掘調査概報』長岡市教育委員会・株式会社大石組



	出土位置	遺物番号		出土位置	遺物番号
上層（Ⅴ層）	SD51	1・3	下層（Ⅶ層）	SI09	69～70
	SD61	2		SI10	71～84
	SX76（上層）	89・90		SX76（下層）	85～88
下層（Ⅶ層）	SI03	4～22		SD66	48～50
	SI04	23～32		SK47	41～44
	SI06	45～47		土器集中地点	91～94
	SI07	51～68		包含層	95～101
	SI08	33～40			

第５図　出土遺物１


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101

第６図　出土遺物２

報告書抄録

ふりがな	ごせんごくいせき
書名	五千石遺跡
副書名	３区発掘調査概報
巻次名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	加藤由美子・岩松和光・竹部佑介・南波　守・松井奈緒子
編集機関	長岡市教育委員会・株式会社 大石組
所在地	〒940－0072　新潟県長岡市柳原町２－１　電話番号 0258－32－0546
発行年月日	2009年３月20日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
五千石遺跡（ごせんごくいせき）	長岡市寺泊敦ヶ曽根（ながおかしてらどまりつるがそね） 燕市五千石（つばめしごせんごく） （大河津分水路河川敷（おおこうづぶんすいろかせんじき））	152021	1250	37° 37′ 04″	138° 50′ 04″	2009年 6月4日～ 10月11日	6,100㎡	大河津分水路 可動堰改築事業 （事業主体：国土交通省 北陸地方整備局信濃川 河川事務所）

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	古墳時代 前期・後期	掘立柱建物跡８棟 竪穴住居跡７軒 井戸３基 土坑・溝・鍛冶炉	土師器・土玉・砥石 管玉・管玉未成品 木製品（杭・板材） 鉄関連遺物	古墳時代前期後半の集落跡。竪穴住居内での管玉製作と鍛冶行為を確認。

五　千　石　遺　跡　－３区発掘調査概報－

2009（平成21）年３月20日印刷　　編集：長岡市教育委員会
株式会社 大石組

2009（平成21）年３月20日発行　　発行：長岡市教育委員会
印刷：株式会社 第一印刷所